別紙４

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　約

論文題目	ピアサポートグループに参加する乳がんサバイバーの語りの分析 －看護師の教育課題の展望のために－
氏　　名	増　永　悦　子

論　文　内　容　の　要　約

論文概要

本研究目的は、ピアサポートグループに参加する乳がんサバイバーの語りの分析を通して、それに関わる看護師の教育課題を検討することである。

序章では、わが国のがん統計の動向を提示し、本研究対象の成人女性の乳がん罹患数や死亡数が第１位であると論じた。そして乳がんを含め、がん体験は大きなストレスであり、多くのがんサバイバーは診断後に、鬱、不安、不確かさ、コントロールの喪失等の、心理社会的な困難さを経験すると文献を用いて論じた。以上より乳がん体験は身体的・心理的・社会的課題をもつことを確認した。前述の課題の中で、心理・社会的課題の改善方法の一つにピアサポートがあり、その意義は「治療選択の決定への影響」「異なる感情の承認の促進」「社会的孤立とスティグマの減少」等であることを、先行研究から確認した。以上を確認した上で、本研究では、乳がんサバイバー同士の支援に関わる看護師の教育課題の解明のために、乳がんサバイバーのピアサポートグループに参加する当事者の語りを基に、その意義の解明に取り組むこととした。そこで、当事者である乳がんサバイバーの声を看護師の教育課題に生かす意義について、文献を用いて論じた。ところで乳がんサバイバーのピアサポートの意義は既知であるが、その名称や定義は十分整理されず混乱した使用状況にあるため、用語の共有を目的に、乳がんサバイバーのピアサポートに関する諸概念を、国内・海外文献を用いて整理し提示した。

第１章では、医療保健領域の文献を中心に、日本人成人女性の乳がんサバイバーのピアサポート研究のシステマティックレビューを実施した。その結果、４つの特徴、

「１．研究方法の違いによる特徴」「２．ピアサポートの検討のために引用された概念・理論と、その研究的背景」「３．がんサバイバーシップの季節で分類した特徴」「４．既存の援助特性との相違と類似」を見出した。これらの中でも「２.」の知見では、これまで主に社会学・心理学の概念や理論に基づいて研究がなされていることを確認した。そのため本研究では、従来から行われてきた社会学・心理学の概念や理論に基づいて、ピアサポート研究を行う立場から脱却し、「語る」ことそれ自体の重要性を尊重する立場をとり、乳がんサバイバーの語りの分析を行うことにした。

そこで第 2 章では、乳がんサバイバーが「語る」こと - その「物語」自体の意義を提唱した研究者の文献を用いて、その意義を論じた。そして研究方法としてのナラティブアプローチを概観して整理し、本研究でのナラティブ及びナラティブアプローチの定義を提示した。さらに医療保健領域におけるナラティブ及びナラティブアプローチの機能と意味を整理し、この領域でのナラティブアプローチの意義を論じた。

第 3 章では、筆者が実施したインタビュー研究の知見に基づいて、乳がんサバイバーのピアサポートグループの意義と課題を論述した。本論文の研究対象の乳がんサバイバーのピアサポートグループは、医療施設内にあり、その施設の医療者との関わりをもつ２つのグループ（A・B 患者会）である。A 患者会参加者のインタビュー研究の分析結果からは、3 つのテーマ『地域基盤性』『病院基盤性』『医療者関与性』を抽出した。そして A・B 患者会のリーダーのインタビュー研究の分析結果からは、『患者会への思い』『同病者への支援』『患者会リーダーのあり方』を抽出した。同病者の仲間のがん再発や死に関わる機会があるリーダーの課題と、リーダーを支援する看護師の教育課題の、一層の解明も今後必要であると考えられた。

第 4 章では、筆者が実施したインタビュー研究の知見に基づいて、乳がんサバイバーのピアサポートグループの参加者の課題を論述した。個々の乳がんサバイバーの課題については、がん患者家族・遺族の体験をもつ乳がんサバイバーに焦点を当て、その課題を論じた。まず、筆者のがん患者遺族研究を用いて課題を述べた。その研究結果は『医師に関する語り』『看護師に関する語り』があり、密接に関連した医療としての『緩和ケアに関する語り』を加えた３つのテーマと、これらに共通に抽出された【見守られ感】【見捨てられ感】を見出した。研究結果から、終末期患者と家族へのコミュニケーションスキルの向上を目指した看護教育が、今後必要であると考えられた。そして、がん患者家族・遺族の体験をもつ乳がんサバイバーの語りの分析結果は【見守られ感】【見捨てられ感】の重なりに加えて、がん患者家族・遺族と乳がんサバイバーの両方を経験している者が、周囲にも患者会にもいない孤独感のあることを抽出した。そもそも家族を喪失する年代にも関わらず、それが周知されない状況があることが確認され、さらに、がん患者家族もまたがんサバイバーになる可能性をもつことを、看護教育で扱う必要性があると考えられた。なお、がん患者家族と遺族の体験を同時にもつある乳がんサバイバーは、ピアサポートグループに参加して病気につい

て十分に浸る体験と、今回のインタビューでがん患者家族・遺族の体験や乳がん体験を語る体験を通して、少なからぬ自己変容に至ったことが確認された。今後の看護教育の課題としては、傾聴を含めたコミュケーション能力の向上のための教育内容と方法の検討が必要と考えられた。

第 5 章では、乳がんサバイバーのピアサポートグループに関わる看護師の教育の中でも、看護基礎教育に焦点化して教育課題を論述した。看護基礎教育では学士の能力だけでなく看護専門職の能力 - 看護実践能力が必要とされており、その能力について文献を用いて論じた。また看護実践能力の獲得過程の例として、筆者らによる研究知見を提示した。その研究結果は、教師主導の一斉授業方法での講義・演習では知識・技術の習得は可能だが、論理的思考力を発展し向上させるには、教育方法の検討が必要と考えられた。また筆者らは批判的思考の態度にも着目して文献研究に取り組んだ。その結果、わが国の看護学生の批判的思考の態度を捉える際の共通要素の存在や、看護学生が共通にもつ 7 つの構成要素を確認した。さらに、批判的思考の態度への効果が確認された学習方法は「グループ学習」「ディベートを用いた学習」だった。そして、第 3 章と第 4 章で論じた研究結果より得た看護師の教育課題を整理した結果、１．知識に関する課題、２．技術・態度に関する課題が見出された。

終章では、本論文の研究成果を章ごとに整理して提示した。最後に、本論文の研究成果を用いた今後の看護基礎教育での展望を論じてまとめとした。

学位関係

学位関係